

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ⑥

——水色のノートから——

丸山ふみ

幼児と秘密

朝から庭に咲く菊の花が幼児達の手で次々と届けられ、保育室の花瓶は勿論、牛乳ビンまで動員されて、空の青さとともに「秋」の真中に幼稚園が包まれてしまったような日のことでした。

職員室のそばのテラスに飾られた花瓶が幾度も倒れ、その度に幼児に「園長先生、ちょっと来て」と呼ばれるので急いでいる書類を机の上に広げたままにして庭先で自由に伸びて花瓶に納まってくれない曲った花を数本抜きとり、空いてる花瓶を求めて廊下へ出てみました。

夏は涼しい風のとおり道であるため廊下には必ず幼児の姿があるのですが、ひよこ組の扉のそばに三名が坐りこんでい

るだけでした。

女兒二名、男児一名が何かを作っているのでもそっと足音をしのばせて近づいてみました。幼児といっしょに生活する者は誤って幼児の足を踏んでも幼児の足が痛くないようにと、底の柔らかい上履を使っているのでこんな時には便利です。

近づいてみると大きい包装紙の真中を頭が入るだけ切つてあります。美穂が切っているのを三奈がみています。白い画用紙を丸めてセロテープがベタベタ貼つてある細長い棒状のものを片手に勝義が立って待っているらしいのです。

私が傍へしゃがむと、勝義が耳のそばへ口をよせて「先生もヒミツに入れてほしいのか」と小声でたずねられてしまいました。

菊の花だけを何処かへさしたら、机の上にひろげてある書類をと一瞬間の中をよぎり、すぐにはうなずけません。大人という者は、ずるい知恵が働き「シーツ」と唇に指をあてて勝義の肩をだいて様子をみることにしました。三奈はニヤッと笑っている視線を向けるだけです。指先で五糎位のセロテープを持つているのですが先は折り曲がって使えそうにもありませんし、片手には二十糎位の長さの青・ピンクの紙テー

ブがひらひらしています。

四歳児は、砂遊びや絵を描いたりしている時、およそその遊びと関係の無いことを話し友達としゃべっていてもその話題の焦点が掴めないことも多く話をまとめるのでなく、それぞれが話をしていることを楽しんでる場面にはしばしば合います。

「劇をするから見に来て」と呼ばれて小さい椅子にかけて待っていても、なかなか劇が始まらず、粘土をセロハン紙で包んだ鉛をもらったり、「トイレにいくから赤ちゃん、だっこして」と膝の上へ人形を預けられたりします。

劇が始まるまで待つことが遊びの中心になっているのと同じように、このヒミツも秘密の内容よりも、秘密と四歳児が三名でいることを楽しんでるのかと思いました。

包装紙の真中にあいた穴へ勝美が頭を入れ、前後からソッーと二名の女児が紙を下げました。日本の衣服の原点だといわれている貫頭式衣は布の中央に穴をあけ、そこから頭だけ出して着るとききましたがその古代の様式が遊びの中で生きています。

この幼児達はそんな昔のことを知るはずありませんが、

人間が必要だと考えてすることは同じだなと笑ったトタンに生憎紙が破れてしまいました。「先生、あかん。ヒミツやのに」美穂に叱られ「ごめん、ごめん」とあやまりながら、あひる組へ入ってセロテープをカッターごと持ってきました。首のうしろの破れを貼りながら「この服は魔法の服やで、うまいことなおるワ」と自分のてれくささをごまかしてしまいました。

テレビや童話の中で「魔法」という言葉が出ると時には一抹の疑問をもつことがあるのに、今日のように突然の場面では自分もまた使うのです。

廊下の片隅でこの数分間の三名の幼児の遊びは、園庭で歓声をあげて担任を中心に「リレーごっこ」をしている幼児たちと「楽しさ」というところでは同じです。

保育室を横切って園庭に出ていく幼児を見送り、一片の白い雲が赤い園舎の屋根を浮き上がらせている青空に目を向けながら、望ましい経験や活動と教師が考えて計画している範囲外で幼児もまた自分にとって望ましい経験をしている秋日でした。

(松阪市立松江幼稚園)